

震災と原発事故から13年、
福島で、こころの病が多発していた

上映会

2025年10月25日(土)

1回目 10時30分～12時30分

2回目 14時～16時

参加費なし（申し込み不要）

【場所】日本社会事業大学B101教室 清瀬市竹丘3-1-30

UDCast対応・日本語字幕版

生きて、 生きて、 生きる。

喪失と絶望の中で生きる人々と
ともに生きる医療従事者たちの記録

制作・監督・撮影：島田陽磨（「ちょっと北朝鮮まで行ってくるけん。」）

撮影：熊谷 裕達 西田 豊 前川 光生 編集：前嶋 健治 音楽：渡邊 崇

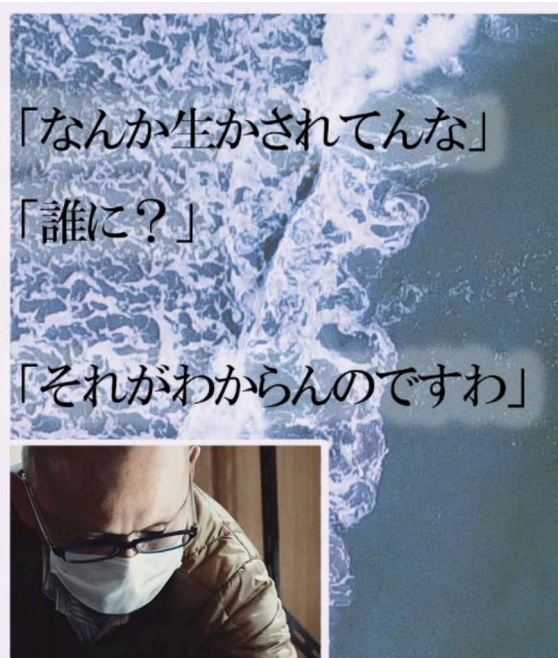
助監督・撮影・宣伝美術：鈴木 響 オンラインエディター：中田勇一朗 効果・整音：高木創

協力：メンタルクリニックなごみ

NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会 相馬広域こころのケアセンターなごみ

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業） 独立行政法人日本芸術文化振興会

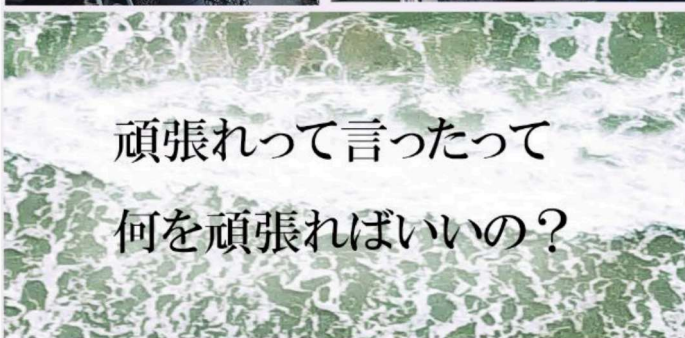
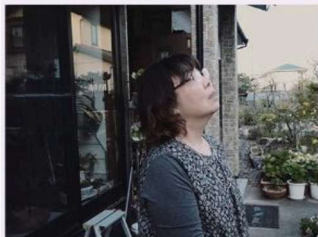
製作・配給：日本電波ニュース社 2024年 / 日本 / 113分 / カラー / ドキュメンタリー



「なんか生かされてんな」

「誰に？」

「それがわからんのですわ」



頑張れって言ったって
何を頑張ればいいの？



「人間もつと泣かなきゃだめだと思う」

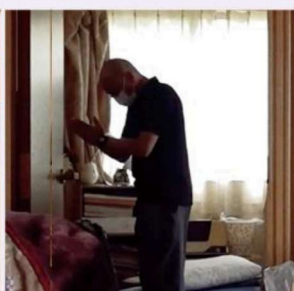
震災と原発事故から13年。福島では、時間を経てから発症する遅発性PTSDなど、こころの病が多発していた。若者の自殺率や児童虐待も増加。メンタルクリニックの院長、蟻塚亮二医師は連日、多くの患者たちと向き合い、その声に耳を傾ける。連携するNPOこころのケアセンターの米倉一磨さんも、こころの不調を訴える利用者たちの自宅訪問を重ねるなど日々、奔走していた。

津波で夫が行方不明のままの女性、原発事故で避難中に息子を自死で失い自殺未遂を繰り返す男性、避難生活が長引く中、妻が認知症になった夫婦など、患者や利用者たちのおかれた状況には震災と原発事故の影響が色濃くにじむ。

かつて沖縄で沖縄戦の遅発性PTSDを診ていた蟻塚医師は、福島でも今後、同じケースが増えていくのではと考えていた。

ある日、枕元に行方不明の夫が現れたと話す女性。「生きていていいんだという希望を持った時に人は泣ける」と蟻塚さんは話す。米倉さんは、息子を失った男性にジンスカンを一緒に焼くことを提案。やがてそれぞれの人々に小さな変化が訪れていく。

喪失感や絶望に打ちのめされながらも日々を生きようとする人々と、それを支える医療従事者たちのドキュメンタリー。



主催 日本社会事業大学 社大祭実行委員会

共催 清瀬・東久留米社会福祉士会 【問い合わせ】 070-5586-5393 (事務局 福本)

※映画は、日本社会事業大学の学園祭の一環として上映します。